



《包 -bus stop-》50S 2012年
キャンバス・ミクストメディア

第48回昭和会展昭和会賞受賞作品

「これまでの制作、研究についての総合的な気持ちで描きました。自分が表現したいことや、技術を今まで以上に完成度を高めたかったのですが、この作品を描いたことで、自分の制作について整理ができたという意味で大切な作品です」

——昭和会賞受賞おめでとうございます。まず率直な感想を。

中原 ありがとうございます。このような大きな賞をいただくことが初めてだったので、なかなか実感が湧かなかったですね。電話がかかってきたときには、ただびっくりして、自分のことのように思えなかつたです。その後、じわじわと、あ、凄いことなんだと思いき直していきましました。

——みなさんの審査のときの印象からお聞かせください。

松村 審査会場の第一印象は鮮明に覚えてますよ。パッと目に入ってきましたから。インパクトという意味では、中原未央さんのこの作品と辻本健輝君の作品が特に目立っていました。それぞれ昭和会賞と松村謙三賞を獲得したのも納得だと思いますよ。

長谷川 私の第一印象は、「非常に変わっているな」というものでした。今までの昭和会賞の路線とだいぶ違っている。リアルに描くことで錯覚させる「だまし絵」的なところがありますね。東京芸大教授で独立展会員の木津文哉さんのようなだまし絵の感覚だね。でも何か奥深い意味も感じさせる。そういうところが面白いと思いました。こうして違ったマインドの人が出てくるのが重要なんです。

南畠 彼女は伸びるなと率直に思いますね。理由のひとつとして、彼女が古典的な技法の勉強をされていて、それがベースになっているということがあります。もうひとつは不思議なエロティシズム。ザクロやアケビは性的なモチーフなんですけど、



第48回昭和会展昭和会賞受賞作品《包 -bus stop-》の前で。
前列左から洋画家・奥谷博、受賞者の中原未央、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、
後列左から日動画廊社長・長谷川徳七、美術評論家・南畠宏の各氏

巨匠への第二步

昭和会展・最新世代の魅力——⑧

撮影・安達康介
本文構成・編集部
取材協力・すし善銀座店

第48回展
「昭和会賞」

中原未央

第48回の昭和会賞に輝いたのは九州産業大学大学院修了後、間もない中原未央《包 -bus stop-》。初入选での受賞という快挙だった。アケビを中央に配したインパクトのある画面。構構力と写実的な描画力、そして現代的なセンスを感じさせる異色の作風が審査員の眼を釘づけにした。画面にこめられた作家の意図を聞きながら、各氏それぞれのアプローチで作品の魅力を語りだしていく。

【ホスト】

- 松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター 招聘教授）
- 奥谷博（洋画家・日本芸術院会員・文化功労者）
- 南畠宏（美術評論家・女子美術大学教授）
- 長谷川徳七（日動画廊社長・昭和会事務局長）

それがいやらしくならないギリギリのところを絵画として引き留めています。彼女がそれをどこまで計算しているのかはわからないですけど、絵画の色気を作り出そうとしている。

奥谷 この絵は、しつこいところがいいね。いい意味での、女性特有のしつこさがあったといい。陰影を感じて表現が生きているからだと思います。普通は陰を取れているんです。私も息子（第47回昭和会賞受賞者でもある奥谷太一さん）には、影をとるように言ってますけど、彼女の場合は、その影がうまく形になり色になっていますね。



《包-life II-》30S 2012年
キャンバス・ミックストメディア
「今回の昭和会賞の招待作家
選考で出品した作品。壁にざく
ろの花を描くことで今までにない
インパクトのある作品となったと
思います。ミニチュアなベンチ
や木を初めて描き、またヤモリを
トリックアート風に描くことなど、
視野が広がりとても楽しんで制
作しました」

きつと絵を描く姿勢がいいんだと思います。絵を描く姿勢が悪いと、作品に品がなくなったりするから、良くないんです。

モチーフを、かに構成するか

——受賞作《包-JUST STOP》のテーマとは？

中原 これは「包シリーズ」のうちの一点です。生命の神秘という大きなコンセプトが根底にあります。ザクロやアケビは、一見グロテスクに見えますけど、でもキレイさに魅かれて、純粹に描いてみたいと思いました。それでいい絵にするにはどうすればいいかと考えて、果実を人の人生に喩えようと思ったんです。種子を包む果実を、子供



なかはら・みお
1986年福岡市生まれ。2010年別府ビエンナーレ。11年第20回富嶽ビエンナーレ展、第2回青木繁記念大賞西日本美術展。個展「生命と種子シリーズ」(ギャラリーSEL)。12年九州産業大学大学院芸術研究科博士前期美術専攻修了。現在、無所属。

**生命の神秘を描きたい。
そのためにさまざまにモチーフを
組み立てています。——中原未央**

**いまはあなたの人生の最大の転換期。
このチャンスはどう生かすかが
大事だと思うよ。——松村謙三**

すものもありますよ。画面を三角や四角に区切って、ここに入るものは何かな、なんて探したりしますね。一般的にはモノを見て、それから触発されて作品にするというのが普通だけど、僕はそうやって寝床に手帳を置いて、次から次へと頭に浮かぶものを書き留めています。

陰影を生かした背景の妙

松村 この絵はきつと、票をたくさん獲るだろうなって思ってたんですけど、私はいまこれを見たときに、背景がすごく効いていると思えました。実は昨年、昭和会賞を受賞した奥谷太一君の作品にも、同じことを感じたんですよ。

中原 この作品では背景の深みを出したいと思っていたので、そう言って頂けてとても嬉しいですが、古くなっている感じとか、キズがついている感じを出したくて工夫しましたから。

松村 ポートフォリオで過去の作品を見ると、大きいザクロやアケビの作品はほかにもありますね。でも昭和会展に出品したこの作品は、背景を効かせるように描いていた。背景そのものは太一君とは違う、あなたらしい感じがするんだけど、背景が強い印象を与えるところは同じですね。南島先

を守る母親に喩えました。人が生きるうえでの緊張感を紐で表したりと、思いついたことを盛り込んで構成していききました。果物は子供を守る母親のイメージなんです。小さく描いたバス停などは、人の生活や文化を入れることで生きてる生活感を表しています。

奥谷 いろいろ持つてるんだね。僕たちのころはそんなのは全くなくて、ただ美しいと心ひかれるものをひたすら描いていた。これを見ると四隅まで等価というか、どこをとっても同じ力で描いてある。モダンな感じがするのはそういうことかもしれないね。私の恩師の林武先生は、いい作品というのはマチエールが米を流したように全体に行き渡っているといっていました。私はそういう意味でこの作品を押し込んだんですよ。

——アケビを大きく描くのは？
中原 インパクトをつけようと思って大きくしました。

奥谷 種の質感とか、よく描いているね。エッシャーの作品のように、ヤモリがいることで画面を目が追っていききますからね。

中原 これはヤモリの写真を撮って、それを構成しました。一番難しいのは構成

まつむら・けんぞう
プリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役社長。他に大阪大学法科大学院招聘教授。大阪大学知的財産センター招聘教授、経済同友会経済・金融委員会委員も。今秋、「松村謙三美術館」を清里にオープン予定。



なので、それをいろんな先生から学んでいます。描き方は写実的なので、モチーフをどこに置いたらいいのかが、問題なんです。

南島モチーフは実際に組み立ててから描いていくんですか。

中原箱とか影は構成を組み立ててから描きます。影がどこに来るかなどの細かい部分は想像です。

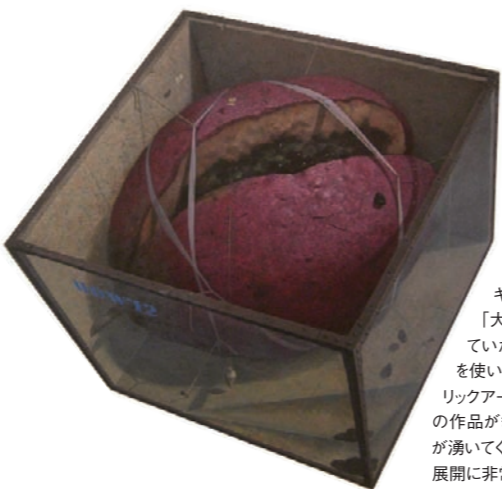
奥谷構成はどういうときにアイデアが浮かぶのかな？モチーフを見てから構成が浮かぶの？

中原実際にこういう絵にしたいって考えて、描いてみて、これはどこに置いたらいいのかなって。南島 バランス？あるいは秩序？

中原ぐるっと絵を見て、画面すべてに目がいくように考えています。トリック的な意味で楽しませたいという気持ちもあります。

奥谷長く描いていると、アイデアがいつぱい浮かんでくるようになりますよ。でも年とってるとすぐに忘れちゃうから、僕の場合は手帳をもつて、浮かんだらすぐに書いておくんです。それで2、3年経って浄化して引っぱり出すんです。

南島ずいぶん長いですね。
奥谷それどころか10年くらい経ってからの思い出



《包 VIII》175×190cm 2012年
キャンバス・板にミックストメディア
「大学院修了のときの作品。これまで描いていたボックスの発展として変形という方法を使いました。変形したことから今までよりもトリックアートの描けてとても楽しかったです。この作品がきっかけで宇宙的神秘性により興味が湧いてくるなど、自分の世界が広がり、今後の展開に非常にためになった作品」

生はどう思われます？

南島それは不思議な符合ですね。彼の場合は影のない背景ですけど、彼女の絵は影がある。両者は多分どこかでつながっています。彼女の場合、影の部分と光の当たっている部分の境界の表現が非常にうまい。無意識かもしれないけど、よく感じて考えています。

松村モチーフは同じでも、過去の作品と比べてこれだけは異質な感じがするのは面白いね。
奥谷うん。この作品が一番いい。

いい意味での女性のしつこさ、 そして若々しさは強みだね。——奥谷博

奥谷 そうなんです。彼は僕のずっと下級生で、空手部の後輩になるんですよ。

——それは不思議な縁ですね。

中原 以前、昭和会で日動火災賞をとられた久保輝秋先生も講師で来られていて、大変勉強になりました。

長谷川 蟻地獄を描く作家さんですよ。第1回の小磯良平大賞を受賞した久保さんね。彼も力のある作家だよ。

——絵の道に進んだきっかけは？

中原 小さいときから絵が好きで、ずっと絵ばかり描いて遊んでいました。だんだん大きくなって、いろんな先生たちの作品を見て、絵以外にも素晴らしい作品を見て、自分の好きな絵でこんなに極められたら、そんな作品が作れたらいいなと思って。高校のときに美大に行こうって決めたんです。

奥谷 高校の先生は絵をやりなさいって言った？

中原 美術の先生が担任だったので、親身になって指導してくださいました。

奥谷 ご両親は？

中原 わりと好きにやりなさいって。

奥谷 僕は高校の先生に強烈に反対されたよ。弁護士になったらどうだって。どうしたらいいかって聞いたら、法科にだって弁護士試験を受

松村 一番いいですよ。やはり先生もそう思われますか。

奥谷 さつき構成を気にしているといってたけど、一番しつかり構図が完成していて、その集大成になっていると思う。色彩もいい。こういう絵は意外に古臭い感じになってしまっただけで、そうならない。

南島 不思議な陰影がありますね。絵画でなければ出せない光と陰り。この陰影感が高く評価されていると思います。それに謎めいたところもある。作者がどういう人であるかを隠すという意味の謎を感じさせます。絵画の色気っていいましたけど、それが若手の作家とも思わせない、かといって大家とも思えない、作り手をうまく隠蔽するような魅力があります。

——確かにこの絵だけ見ると、若い女性が描いたとは思えませんね。

南島 それは非常に重要ですね。あ、これ若い人の絵だなんてわかってしまう絵もあるし、ああ、長年やってる人だらうなって分かる絵もあるけど、



《無題》OS 2011年 キャンバス・ミクストメディア
「大学のころに描いた小作品。以前から描きたいと思っていたリース遊び心で描いた作品」

奥谷 僕は中原さんに初めてお会いしたけど、どういう人に教わったの？

中原 大学では宇田川宣人先生に教わりました。

南島 ご存じないですか。東京芸術大学の卒業生で、九州産業大学の学長をされた方です。

奥谷 宇田川……九州の？

中原 はい。

奥谷 じゃ、空手部だ。後輩。

(一同驚く)

松村 奥谷先生が芸大に空手部を作ったとお聞きしましたけど。

残って研究室で夜8時間くらい毎日描いていたら、2か月ほどで本当におかしくなった。やめられなくなっちゃうんだよね。人に挨拶もできなくなっちゃう。話もできなくなっちゃう。当たり障りのないのが、だいたい6時間くらい。それ以上はやめた方がいい(笑)

中原 そうなんです。気をつけます。

昭和会賞の傾向と対策とは？

——コンクールへの出品歴は多いんですか？

中原 在学中は、全国の美術コンクールに出品していましたが、入選まででした。別府ビエンナーレとか、青木繁大賞展、静岡の富岳ビエンナーレとか。小磯良平大賞展は選外でした。昭和会も、前回初めて出しましたけど選外でした。今年、初めての入選が昭和会賞だったんです。

長谷川 昭和会賞は入選回数もキャリアも関係ないからね。入選を重ねている作家は、逆に古臭くなってしまっますよ。新しみがなくなってしまう。見慣れてしまうからでしょうね。前回と大きく変わったんないんだけど、また同じじゃないか、進歩していないという風にみられる場合も結構あります。キャリアがあって、描く力はある



《山遊び》30F 2011年 キャンバス・ミクストメディア
「今まで描いてきたボックスから大きく変えた作品。四角く箱が空いている壁に風景が描かれているイメージで描きました。その表現の難しさでとても苦戦。もっと技術を高めようと身にしみた作品になった。この作品を描いたことにより、バリエーションがだいぶ広がったと思います」

人は入選はするわけです。しかし賞を獲得ほどの新しさがない。どうも、昭和会の傾向と対策のようなものがあるんじゃないかな。昭和会賞というと、こういう人じゃなくちゃ、というイメージが固まってきてしまう。でもこちらとしてはその殻を破ってほしい。昭和会の賞は常に動いている。そういうものにも脚光を浴びていくということが大切ですから。

——常に新しく変わっていく昭和会賞の受賞作と



みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ。

奥谷 一日に何時間くらい描いてるの？

中原 5、6時間ですね。

奥谷 そう、まあ……いいでしょう。

松村 描く時間も大事ですよ。

奥谷 あんまり長く描いていると、頭がおかしくなるんですよ。僕は芸大を卒業したあと、大学に

モチーフに頼らない、画面から現れる

エロスを描ければ世界に通用できます。——南島宏

して、中原未央さんは割りど適当だったと？

長谷川 割りど適当ではなく、大変適当なのは(笑)。まったく新しい作風を昭和会賞にするのは難しいですね。こういう新しい才能は、今後どうなるか読みづらいですから。だからこそ、そこからもう一歩出て行って欲しい。これで留まっちゃ困るんです。受賞は、この作品は完成されていますよ、とっているわけではないんです。未完でいい。むしろ完成されたら面白くないですよ。

奥谷 ところで賞金はいくらですかね？

中原 200万円です！

奥谷 僕らのころは30万円でした。大金でしたよ。手が震えました。芸大のお手当てが2か月で8千円でしょ。そのときの30万円ですから。

松村 先生は何に使われたんですか？

奥谷 僕はキャンバスとイーゼルと、いまでも使ってるキャビネットとか。あとは芸大の副手の仲間たちとちゃんこ鍋を食べに行つてドンチャカ騒ぎをしたけど、大金すぎてなかなか減らなかつたですね。

長谷川 中原さんはどうするの？

中原 これまでの奨学金を返済して、あとは貯めようかと思っています。

松村 絵描きは使わなきゃダメだよ。自分に投資しないとね。

最大のチャンスはどう生かすか

——いま一番の悩み、あるいは課題は？

中原 こんな大きな賞をいただいたので、これを第一回の海外派遣にも行けたし、安井賞でも最後まで選考に残った。独立の会員にもなれた。変わった時にチャンスがあった。だからこの受賞をきっかけにどんな自分の可能性を広げていくべきだよ。

松村 人生の転換期は必ずあって、そのチャンスは掴むものではない。チャンスは転がってくるものだよ。それがあなたのもとに転がって来たんですよ。奥谷先生の話を聞いていても、人生で成功される方はやはり強運をもっていることがわかりますよね。実は今日、中原さんと奥谷先生に会わせただけです。奥谷先生はなかなかこういう場に来てくれないんだけど、あなたのために出てやろうと言ってくれました。これもまたあなたの強運のひとつだと思いますよ。

奥谷 僕の時、こんな風にみなさんが祝福してくれる機会はなかったんですよ(笑)

——どうすれば良いアーティストになれるのか、



はせがわ・とくち
日動画廊代表取締役社長。1939年東京都生まれ。64年住友銀行東京支店勤務を経て日動画廊入社。98年コマンドール芸術文化勲章をフランス政府より受章。

パリへ行つて、世界を見て欲しい。
それが画家として大きく飛躍する一歩につながる。

長谷川徳七



《内(うち)》10S 2011年 キャンバス・ミクストメディア
(第2回青木繁記念大賞西日本美術展出品作)
「この作品の以前は、1つのボックスに果実が入っているというのばかりでしたが、ボックスを小さく区切るといった変化を加えた初めての作品。今のボックスを区切る絵のきっかけとなりました」

《流転する》

板・ミクストメディア 2010年
「大学のときの講義で作った作品。小さくカットした板に描いた連作で、普段描いている種子や、さらに生き物を取り入れて、生死について注目して描きました」

- | | | | |
|---|---|------------------|---------------|
| 1 | 5 | 1 (4.5cm×10.5cm) | 2 (8cm×4.5cm) |
| 2 | 3 | 3 (4.5cm×8cm) | 4 (4.5cm×8cm) |
| | 4 | 5 (4.5cm×10.5cm) | 6 (8cm×4.5cm) |
| | | | 7 (8cm×4.5cm) |



みなさんから一言ずつお願いします。
松村 私はコレクターとして側面からサポートさせていただけ、道場破りじゃないけど、いろんな方の評価を聞いていて、でも自分の独自性を出していけばいいんじゃないでしょうか。

長谷川 今後どう変わっていくのが最大の焦点ですね。昭和会の受賞者は、日動画廊のパリのアトリエで数か月間、制作できるんだけど、それも伸びていってほしいから。いつまでもこのままではいけない。世界を見た作家と見てない作家とは全然違うんですよ。奥谷先生もパリに行つてから色彩が変わつたし絵も変わった。いまがその大事なターニングポイントなんですよ。

奥谷 何も描かなくてもいい。パリの街でも駅でも、見るだけでいいんですよ。僕らの頃は日本では美術館といつても展覧会は大変少なかった。パリの美術館では子供が床に腰をおろして先生の絵の説明を聞いていた。名前も知らない現代アートの画家の絵でも熱心に説明しているんですよ。そういうのを感じるだけでもいいですよ。

南島 同感です。パリに行つたら、見ることに時間を費やすといい。僕は学生たちに、4年間絵を描かなくていいと言っています。その代わりいろんなものを見る、絵はそれからいいと。中原さ



《ざくろ》3S 2010年 テンペラ
「大学のときのテンペラの講義で制作した作品。普段と違う技法を使うことでとても楽しんで制作できました。宗教的なイメージを色濃く出したいと思いました」

んは描く力は十分もっているんで、しっかりと見るとして期待できると思います。これを深めていくと、世界で通用します。いまはまだモチーフに頼っているというか、モチーフに何かを語らせようとする意図が見えます。27歳だからそれは仕方ない。でもザクロもアケビも消えて陰影だけになったらどうなるか、説明的な要素を全部とっていったときに残る絵はきつと素晴しいはずですよ。どんなものも描いても全体に不思議なエロスがある、そんな絵に辿りつくような研鑽を積んでいって欲しいですね。

松村 南島先生がここまで褒めたことないね。一年以上、座談会やってるけど「世界に通用する」なんて言ったことはない。

中原 本当にうれしいです。先生方、ありがとうございます。これまで以上に頑張つて、このチャンスを生かしきれようと思います。